

ガールズ&パンツァー 私の恋人は侍です!!

アルティメット〇〇

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガールズ&パンツァーの世界に産まれた主人公、相良大紀。彼は、今やひ現代では消え去った筈の、『侍』であった…

しかし、何故かひよんなことから女子校に入学することになった。しかも、他に4人も同じように男子が入学してきた…

という事で、ガルパンとるろうに剣心が好きなので、書いてみることにしました！

話の基礎はガルパンで、技などの他の部分をるろうに剣心から持ってきてます。

ハーレム、戦闘、シリアス、などが含まれます。

目次

西住みほ編 第1章 出会いの1学期

エピソード

第1話 女子学園に転校?!いきなり混乱する相良君! | 3

第2話 相良君、同じ共学化テスト生の仲間たちと対面します!

5

第3話 相良君、いきなりピンチ?! | 8

第4話 クラスメイトと対面です! | 12

第5話 戦車道、勧誘します!! | 17

第6話 相模くん、別の女子転校生と出会います! | 19

第7話 相模くん、女子生徒3人とお友達になりました! | 23

第8話 相模君、悪夢の再来です: | 31

第9話 戦車、探して乗ります!!前編 | 36

西住みほ編 第1章 出会いの1学期 エピソード

…ここは、とある学園艦に建てられた市民体育館。いつもは老若男女が汗を流し、運動している姿が日夜見られるはずなのだが、今日はやけに静かだ…理由は、とある催しが、この体育館で行われているからである。体育館の外には、このような看板が立てかけられている：「2015年事件に関する資料展示会」…ここには、2015年事件当時に使用されていた武器弾薬や服装などが展示される。

そして、この催しが行われている時は、必ずといっていいほど、人が泣き崩れる姿がある。

その泣き崩れる人とは、毎年あらたに判明した、死者の遺族である。泣き崩れる者、何も言えず、ただ呆然と立ち尽くす者、母親に泣きつく子ども…

なぜこのような催しが行われているのか。普通の事件なら、このような催しは行われぬ筈である。その答えを知るためには、まず2015年事件について知る必要がある…なお、2015年事件に関しては、わからないことが多くあるため、不確実な情報が含まれている可能性があるが、そこは許して頂きたい…

かつて、戦後最悪の武力闘争があった…

2人の政治家の確執に端を発したたった一度の傷害事件が、日本全国を巻き込む、権力闘争へと発展したのだ…

この事件は、1年間にも及ぶ、非常に長く、また、内容の残酷さや死傷者の数から、内乱とも呼べる事件だった。そのため、この事件は、発生していた年からとって、「2015年事件」や、「2015年内乱」とも呼ばれる。

この事件にて死亡した人間の数は、わかっているだけで5万人以上。

負傷者は、10万人を越えるという。なお、この数字は、地震や自然災害などによる死者を除けば、過去70年で起きた事件で、死傷者数1位となっている。

正確な死者の数は、事件から5年が経過した、2020年現在でも判明しておらず、警察や政府が捜査をしている。

だが、今年のこの催しは、去年とは違う点がひとつだけある。それは、とある高校生が来ていた事である。

その彼の名は、相良大紀（さがらだいき）、17歳。だが、この相良大紀という名は偽名であるらしく、本名は不明…

彼のスペックは、身長170cm、体重80kgを越えるデブである。だが、彼はその見た目によらず動きは機敏であり、その動きは常人では見えない程早い。

彼が人間離れた動きが出来る理由は、とある剣術を会得しているからである。

その剣術とは…「飛天御剣流」…かつて、明治維新時に居たという伝説の抜刀齋、緋村剣心が使っていたという剣術が、現代に残されていたのである…だがなぜ、普通の高校生であるはずの相良大紀が、なぜこのような剣術を会得しているのか…それは、後に判明する…

第1話 女子学園に転校?!いきなり混乱する相良君!

「…どういふ風の吹き回しかな…」

とある学校の校門の前に、俺、相良大紀は立ちながら、悩んでいた。その理由は極めて単純。

俺「…どーして転校先の学校が女子校なんだよおおおおおおお!!!」

…校門に、大洗「女子学園」と書かれた看板があり、その奥に立派な校舎があり、女子生徒達がどんどん入っているからである。

そして校門の前という最悪な場所で大声を上げてしまったが故に…

女子生徒A「え?誰あの人」

女子生徒B「知らなくい。変態とか?」

女子生徒C「マジで怖いんだけど…しかもデブだし、早く行こ」

俺「あつ…」

…当たり前だが、周りの女子生徒から悪い意味で注目を集めてしまったのだ。

俺の心(最悪だ…転校先の学校は女子学園だし、いきなり大声上げて周りから奇異の目で見られるし、迎えに来るって言う生徒会長さんもいねーし…どーしよ(´・ω・`))

「おい、そのプニプニ君」

「会長!いくら何でもプニプニ君は失礼ですよお〜!」

「だが柚子、会長の言った通り、あいつはプニプニしているデブだ。デブをデブと言って何が悪い」

俺「なーんかすつげえ悪口言われてる気がするけど気にしないでおこう…そしてあなたがた3人は誰ですか?」

柚子「私は生徒副会長の小山柚子。君が新しく転校してきた2年生

の相良大紀君だね？よろしくね」

桃「私は生徒会広報を担当する川嶋桃だ。よろしく。」

俺の心（ふむ、巨乳副会長とメガネ広報先輩か、覚えておこう…あれ？つてこたアまさかこのちっこい女が…いやまさかな）

???'「キミイ、いますつごく失礼なことと考えてなかつた？まあいいや。私はこの学校の生徒会長の角谷杏だよ」

俺「よろしくお願いします。」

杏「一応聞いとくけど、自分が女子学園に転校してきた理由は知ってるよn俺「忘れました」（くい込み気味）

杏「…：忘れたの？」

俺「忘れたもなにも、忘れたからあんなに大声上げて絶望してたんでしようが…」

桃「開き直ったなお前…」

柚子「生徒数が減少してて、廃校の危機が迫っているんです。それで廃校阻止のひとつとして、共学化する案が出たから、まずは共学化の試験として男子を5人ほど入学させる…ですよね？会長」

俺「そうでしたね…というか、他の4人はどこに？見当たらないんですが…」

杏「先に生徒会室で待ってるから、早く行こ」

俺「了解です」

さて、共学化テスト生として、大洗に入学した相良大紀。彼がこれからどんな人生を歩むのか、楽しみである

第2話 相良君、同じ共学化テスト生の仲間たちと対面します！

生徒会室…

ギィイ…（ドアを開ける音）

俺「失礼しまくす…」

???「お、来たなく最後の奴が」

???「まったく…待たせやがって…さつさと並べよ、ノロマ」

柚子「まあまあそう攻撃的にならなくても…同じテスト生なんだし…」

???「ダレカタスケテ…カタカタカタカタ…」

???「ん？…あー!!誰かと思ったら大紀先輩じゃん！」

俺「ん？…はっ!!（。ㇿ。）まさか!!お前、永谷三笠か?！」

三笠「そうですねよ!!永谷三笠ですよ先輩!!久しぶりですね!!」

俺「お前も元気そうだな！」

杏「ん？2人とも知り合いなの？」

俺「知り合いもなにも、中学の後輩つすよ。」

杏「そっかア〜知り合いだったんだ。」

???「会長、さつさと自己紹介をさせてください。早く教室に行きたいので」

杏「まあまあそう焦らずにさあ〜…と言いたいけど、早速自己紹介してもらおうか!まずは斎藤君から!」

齋藤「わかりました…俺は斎藤一（さいとうはじめ）だ…趣味は武道、特に剣道だ。まあ、よろしく。」

桃「次はこのやんちゃそうな奴」

???「誰がやんちゃやそうだブチ〇すぞ…まあいい。俺は桐谷 真吾（きりがやしんご）。永谷と相良とは昔からの知り合いだ。趣味はエアガンによるサバゲー。特技は木刀を使う我流剣術だ。そして大の甘党だ。まあ、よろしく頼むぜ」

俺と永谷の心（言っちゃったよこいつ…）

俺の心（我流剣術とかさあ…）

三笠の心（言わなくてもいいこと言っちゃうんだからこの人は…）
真吾「なんか言ったか？」

俺と三笠「いや、なんも言っていない」

???「え、えーと…ぼ、僕は刈谷 裕二（かりやゆうじ）…です。学年は2年生で、趣味は…車…と飛行機です…よ、よろしく…」

三笠「じゃあ次は僕かな。僕は1年の永谷三笠（ながやみかさ）です。真吾とは中学からの同級生で、相良先輩とも中学からの知り合いです！2人には中学の時から振り回されてます！」

俺「ん？」

真吾「お？」

三笠「2人でいつも暴走してなんかやらかして、何故か俺も先生に怒られるというとはつちりを何度も受けました！まったく、とぼつちり食らって怒られるこっちの苦労も知って欲しいもんですね〜」

桃「(*?m?) プツ…」

柚子「ふふっ…(*、艸、)」

俺と真吾「「…(°D?)」」

俺の心（三笠あ…）

真吾の心（てめえ…）

2人の心（（後で覚えとけよ…（☒言☒?）（☒言☒?））

三笠「趣味は読書やミリタリー系ですかね。よろしくお願いします！」

俺「さて…最後は俺か。俺は相良大紀！三笠と真吾は知ってると思うが、趣味はアニメやミリタリー系！そしてなんと言っても根っからの鉄道好き！いわゆる鉄ちゃんだ！特技は…あれ、特技…：特技は今のところなしかな。好きな物は…強いて言うならメロンといちご！先に言っておくが、彼女いない歴〃年齢という、誠に、まことに不名誉な称号を持っている。これから同じ共学化テスト生としてよろしくな！」

杏「なかなか個性溢れる子ばかりだねえ〜君たち〜wいやあ〜中が良さそうでよきよき〜」

桃「では、それぞれのクラス割りを発表する。まずは1年生。永谷と桐谷は同じ普通2科、1年A組。続いて2年生は、2年A組に、相良と刈谷。2年C組に斎藤だ。何か質問は？」

俺「特に無しっす。」

真吾「俺も特にないな。」

斎藤「俺も聞きたいことは無い」

三笠「僕も無いです。」

刈谷「僕も別に…ないかな…」

杏「よーっし。じゃあ今から15分後にホームルーム始まるから、それまでに各々のクラスで席に着いて待つこと。いいね？」

5人組「わかりました」

杏「あ、そうだと忘れるところだった…相良君はちよつと残ってくれる？」

俺「はい？なんでしよう？」

杏「君には折り入って聞きたいことが幾つかあるんだよねえ。」

第3話 相良君、いきなりピンチ?!

他のテスト生達が生徒会室を出た後の生徒会室…

杏 「いやあく悪いね、わざわざ残しちゃって。」

俺「別に構いませんよ。で、折り入って聞きたいことというのは?」

杏「そうだねえ…どこから質問しようか…:じゃあ…、君は2015年事件って事件、知ってるよね?」

俺「…え?…何言ってるんですか、あの事件はテレビやラジオ、新聞でも取り上げられて、事件の残酷さから別名「2015年内乱」とまて言われている事件ですよ?この学園艦でもそうですが、日本全国で毎年資料展示会まで行われているんですよ?知らないわけないじゃないですか」

杏「違う違う。私が聞きたいことはそんなことじゃないんだなく」

俺「はい?じゃあ何が聞きたいんですか?」

桃「貴様は知っているか?例の事件のとき、今の時代珍しい、日本刀を使って戦場を駆け巡った、2人の奇妙な子供がいたということ。

俺 「ええ…聞いたことはありません」

杏「1人は死んだとされていて、名前などは今も一切わからない…だがもう1人は今も生きていと言われている…彼は、かつて明治維新時に居たという最強の抜刀斎、緋村剣心も使っていたという飛天御剣流を学び、敵対する人間を、相手が銃を持っていたとしても一撃で斬り殺していたという…そして彼はこう呼ばれていた…「第2の緋村剣心」…と」

桃「しかし、彼は戦いの途中で、不覚にも頬を斬られ、傷が出来た。左頬に十字傷が、な。」

杏 「しかも、彼はデブの癖に身体の動き、跳躍力、攻撃力も常人より圧倒的に上をいってたらしいんだよ。」

俺 「…それで?」

杏「君には、特徴的な傷が左頬に…:そう、彼が負った傷と非常によく似た十字傷がある。何故その十字傷が出来たのか。…君は知って

る筈だよ? 「第2の緋村剣心」と呼ばれる、奇妙な人間が、一体誰なのか。君が知らないわけではない。その理由はすごく簡単」

杏「…だつて、自分自身の事だから。そうだよね? 相良くん。いや

…「第2の緋村剣心」…篠原 大輝 (しのはら だいき) 君?」

俺「…」

俺「…はい? 何を言ってますか貴方は。俺が第2の緋村剣心? ふぎけないでくださいよ。」

杏「…そう。これだけじゃあまだ君を第2の緋村剣心と特定するには情報が足りない。だけど、今から見せるものを君がみた時、君は今みたいに笑うことが出来るかなあ? ニヤツ」

俺「…なんだと?」

杏「君はこの刀を…知ってるはずだスツ…(鞘に入った日本刀を右手に前に突き出すように持った)」

俺「!!!」

杏「ほおら、顔色が変わった」

俺「会長…なぜ…なぜ…!!」ギリツ (歯ぎしりの音)

俺「…なぜ貴方がそれを持っている!!!」

柚子「学園艦に乗り込む時に、手荷物検査があつたでしょ?」

俺「…まさか…その時に…すり替えたつてののか？」

杏「そう。本来なら銃刀法違反で警察の御用になるところだけど、調べたら君、特別に日本刀を持ち歩くことを政府から認められているみたいだねえ、警察から返されちゃってさ。管理に困ってたんだよ。」

俺「というか、どっからすり替える為の刀持ち出したんだよ…」

杏「まあ細かいことは気にしない気にしない。」

俺「…で、俺の経歴を知って、どうするんです。このことを言いふらして、俺をこの学校から追い出すんですか？」

杏「ああ、そのつもりだよ…ただ…ちよつとやってもらいたいことがあるんだけど、それを引き受けてくれるなら、追い出すことはしない」

俺「…そのやつてもらいたいことは？」

桃「貴様は、戦車道という競技を知っているか？」

俺「え？…ええ…ミリタリー系も趣味なので、基本的なことは知ってますが…」

柚子「それで、うちの学校の廃校を阻止する為に、この学校で戦車道が復活することになったんだけど…」

俺「…まさか…」

杏「そう。そのまさかだよ。君にやつてもらいたいんだよ、戦車道を。」

俺「…お断りします。あまり目立つようなことはしたくないので。」

杏「…ほーん…じゃあ言いふらされてもいいんだア？君が…《人殺し》であることであることを」

俺「…」

杏「君が人を殺しまくってきた殺人鬼とか、愉快犯とか。言い様は沢山だよ。」

俺「ブチツ…おい…チビ女!!貴様俺が好きこのんで人を殺してきたたでも言いてえのか?!俺が好きこのんで刀を持ったと?!」

俺 ダンツ！（机を強く叩いた）「ふざけるのもいい加減にしゃがれよ!!俺が…俺が…!!…どんな思いで…俺が…戦ってきたと思って

んだ…」

俺「いいよ分かったよ…やってやろうじゃねえかよ!! 廃校阻止のために!! 引き受けるよ戦車道をやること!!」

杏「…そっか、なんだかんだやってくれるんだ…じゃあ、行っくいよ。」

俺「…失礼します。クルツ」

コトツ（ドアの前で立ち止まった）

俺「会長、勘違いするなよ。俺が戦車道をやるのは、学校の為であつて、けつしてあんたの為にやる訳じゃねえからな」

ボタン！（ドアが閉まる音）

杏「…ごめんね…相模くん…最低な生徒会長なのは分かってる…君に辛い思いをさせちゃう事も分かってる…でも…仕方ないんだよ…私にはもう…これしか方法がなかったんだ…学校を守るためには…ポロツ…」

中学時代から面倒を見てくれるロリ先生だ。え？なんで中学教師が高校生担任してんだって？俺がいちばん知りたいよ…

ちなみに小悪魔なつみが先程俺に繰り出した股間アツパーカット、通称「股アツパー」は、自らの身長を生かしたなつみ先生お気に入り、の攻撃手段で、その威力たるや自宅に侵入した強盗にこの技を決め、あまりの痛さに強盗を気絶させた程の威力を持つ。男子にとっては、一撃必殺されかねないヤバすぎる技である…(((;;・、・D・
())カタカタカタカタカタカタ

俺「あああああああああ…痛てえ…ん？…!!!。D。ハッ!!!その桃色の髪の毛！平原のようにフラットな胸!!身長140cmの合法ロリボディ!!そしてさっきの股間アツパーカット!!間違えるはずがない!!浅香先生!!浅香なつみ先生じゃないですか!!」

浅香先生「相模くん、シバキ倒されたいですか？それとも成績1にされたいですか？(??ω?)」

俺「誠に申し訳ありませんでした< () >へゴンー!」
浅香先生「分かればいいんですよ。とりあえず時間が迫ってるのでさっさと教室に入りやがれなのです」

俺「あいつ変わらずの毒舌ですね…まあ入りますけど…ガラララッ」

女子生徒達「えっ誰あの人」「そういえばもう1人うちのクラスに来るって言ってたっけ」「それよりあの髪の毛桃色の先生、小さくて可愛い(?? ??c)」

…まあこうなることは予想出来ていたのだが、やはり緊張するものだな…

なつみ先生「それではホームルームを開始します！まずは自己紹介から！はい、相模くん！」

俺 「え?!いきなり俺から?そ、それはちよつと…(??▽?;)」

女子生徒達 「((●) ω (●))」

…ナゼダロウ、サツサトヤレトイワレテイルキガスル…

俺「はあ…分かりました、やりましょう。俺は相模大輝。共学化テスト生として、今日から入学した。よろしくです☆(ω・)vキヤ

ピ」

女生徒達「…えっ…」

俺「え?…!!! (。D。) ハッ!!!」

しまったアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!なに
が☆(ゝω・) Vキャピだよ!!ドン引きされちまったじゃねえかよオ
!!恥ずかしすぎる…

俺「…:(;? ;):プルプル…」

なつみ先生「相模くんこれはやってしまいましたねえ? (ゲス笑
顔)」

俺「:悪いが逃げさせてもらおうツ!! (顔真っ赤)」

俺は教室を飛び出してしまった…

なつみ先生「さーて、盛大に自爆した相模くんはほつといて、ホー
ムルーム、しましょっか!」

刈谷「いや先生鬼ですかあなた?!鬼畜ですか!?!Σ(。ロ。;)」

なつみ先生「まあ相模くんがああやって自爆するのは今回が初めて
じゃないので笑笑 (≡▽≡)」

刈谷「あ、悪魔だ… (孫悟飯風)」

そして、昼休みの学食にて…俺を含めた刈谷、真吾、三笠の4人組
は飯を食っていた…

俺「やつちまっただよおおおお…。…:(ノD。)…。うわあ
あ…」

三笠「うわあ…それはそれは盛大に自爆しちゃいましたね…」

真吾「(。ー。ー) ふっ…無様なもんだ…」

俺「辛辣ウ?!」

刈谷「あれは仕方ないよ相模。あんな恥ずかしすぎる自己紹介した
人僕初めて見たよ…それに女生徒も散々ネタにしてたよ?」

俺「マジかア…それじゃあ午後の全校集会出れねえじゃん…」

三笠「というか、篠原先輩…相模先輩。」

俺「おいこら三笠」

三笠「(o3o)〜♪」

俺「チイツ…っで？」

真吾「お前、昼休みまでの間教室に居なかつたらしいが、どこに居たんだ？俺らまで探しに駆り出されて大変だったんだぞ？」

そう。俺は自己紹介で自爆した後、あまりの恥ずかしさから、教室に戻るに戻れず、昼休みまで身を潜めていたのだ。

俺「俺が身を潜めていた場所は…」

3人「場所は？」

俺「…屋上にある水タンクの上だ」

三笠「いやなんつーとこに隠れてんだよ先輩?!」

真吾「そんなとこ探す訳ねーだろ?!」

俺「勝った…計画通り…」

刈谷「でもこれからはそこ、使えないねえ〜言わなきやこれからも使えたのに」

俺「え？なんでさ」

三笠「真吾？これからは水タンクの上から下まで総ナメするかの如く探そうな!!（、・ω・）bグッ！」

真吾「合点承知!!（||。ω。）b」

俺「」

…またやってしまった…自ら逃げ場を潰してしまった…

まーた隠れ場所探さねえと…

刈谷「大輝、大人しく教室来たら？」

俺「うーん…（ーωー）…ポリポリ…あれだけやらかしちゃった後に教室戻るのは勇気が居るぞ…あ、そうだおめーらに話があったんだ」

真吾「なんだ？」

俺「お前ら3人さ、まだ必修選択科目選んでねえだろ？」

刈谷「確かにまだ選んでないけど…」

三笠「僕と真吾もまだっすね〜。何か面白そうなのがなくてです…」

俺「実はな、面白そうな必修選択科目を見つけてきたんだよ」

刈谷「何それ、気になるな〜」

三笠「教えてくださいよ！」

真吾「なんだその面白そうな科目ってのは？」

俺「…戦車道だよ」

この時、俺はまだ知らなかった…今この瞬間、この日本のどこかで

…

ひとつの怨念が動き始めていたことを…

そしてこれが、俺が再び刀を握ることになろうなど…

その頃、日本のどこかにあるひとつの部屋では…

???'「…見つけたぞ…：ようやく見つけた…まさか学生になって学園艦
に乗り込んでいようとはなあ…篠原大輝…お前は…俺がいつか…必
ず殺してやる…ウヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤWWWW」

この時

第5話 戦車道、勧誘します!!

俺は、戦車道をやらないかと三笠たちに誘いを掛けている。

三笠「戦車道って、戦車に乗ってドンパチやる、あの戦車道ですか？」

俺「そう。お前らはこれから全校集会で聞くとと思うが、数年後に戦車道世界大会が日本で行われるとの事。それに備えて全国の高校、大学に戦車道に力を入れるように要請があつたんだと。

で！その要請に応えてうちの高校も20年ぶりに戦車道を復活させるつもりらしい。しかも戦車道での成績優秀者には、食堂の食券100枚、遅刻見逃し200日、さらにダメ押しに通常授業の3倍の単位を与える!!…との事だ。」

刈谷「へえ〜！それは美味しい話だね！」

三笠「えー、でもそんなに美味しい話、普通ありますか？戦車道での成績優秀者には色々特典付くんじゃ？なんか裏がありそう…」

真吾「三笠の言う通りだ。タダより高いものはない、って言葉もあるくらいだ。なんかあるだろ絶対…例えば、意地でも戦車道やらなきゃいけない理由がある…とか」

俺「…やっぱ察しがいいお前らには勘づかれるか…しゃーない。わけを話すよ。しかし…」

刈谷「しかし？」

俺「これから話すことは、トップシークレットな内容だ。誰にも話すなよ。」

3人とも「コクッ」

(内容を説明中…)

三笠「マジかア…そんな理由があつたのか…」

真吾「そんなことだろうと思つたよ」

内容を説明しちまったが、まあこいつらなら信用出来る。大丈夫だろう

俺「それで、結局どうする？戦車道をやるかやらないか。俺はやるぜ、何しろ単位3倍だからナ！成績がヤバたんになる可能性がふつー

にあるから保険としての意味もあるが、何より戦車に乗れるのが1番だな!!」

え? 現金な野郎だつて? 成績がヤバくなる可能性がふつーに俺にはあるのだ。

三笠「先輩、仮に戦車に乗れるとしたらどの戦車に乗りたいですか?」

俺「俺はアメリカのT34重戦車かな。中戦車ならドイツのパンターG型だな。」

真吾「俺は97式中戦車、所謂「チハ」だな。チハは可愛いしな」
刈谷「僕は…ソビエトのT34—85かな。」

俺「やめとけ、ソ連戦車の居住性はクソ悪いらしいぞ…」

三笠「僕はシャーマンファイアフライですね。かのミヒヤエル・グイットマンが乗るティーガー重戦車を撃破出来る火力あるんですから」

みんな乗りたい戦車バラバラやなあ。まあパンターにはパンターの長所が、T34にはT34の長所があるしな。

俺「とりあえず! 戦車道絡みのことは、学校からの通知とかがあるまで、他言無用だぞ。特に戦車道復活の本当の理由を他人に知られると混乱を招いちゃうからな。それじゃあ今日は午前中で学校終わりやし、帰ってまた集まるべ」

三笠「了解です。集合場所は…」

真吾「三角公園でいいだろ」

刈谷「そうだね、それじゃあまた!」

さて、遊びの予定もできたし、早く帰るか…

…そういえば、2015年事件からもう5年か…まだ内乱集結から5年しか経っていないというのに、もう戦車道世界大会の準備始めているのか。まだ2015年事件が完全に解決した訳じゃないのに…

これだから政治屋連中は嫌いなんだよ。物事が起きた時は責任逃れすることしか能がないくせに、隠蔽工作と情報操作だけは1人前なんだから…まあ今政治屋の愚痴をこぼしても仕方ねえ、早く帰って遊びに行く準備だア!

第6話 相模くん、別の女子転校生と出会います！

それは、翌日の事だった。俺は昨日の自爆事件のことをクラスの女子たちから弄られるという拷問を凌ぎきり、安息の昼休みが訪れたはずだったのだが…

俺「まさか三笠達と今日は飯を一緒に食べぬとは…」（…）

俺「刈谷は腹壊して保健室だし、真吾達は教室で食べるみたいだし…」

俺「どうすつかね…ん？」

俺がグデーっと机に突っ伏していたら、とある女の子が目に入っ

た。どこにでも居そうな、茶色、とでも言うのだろうか。

そんな髪の毛の色をした女の子が居た。普通なら、「女子に関わるとろくなことねーし」と無視するのだが、何故かその子だけは目が離せなかった。

??? 「…はあ…」

俺「あの子…一人で昼飯食べるつもりなのか？」

俺がその女の子を見ていると、別の女子生徒2人が声をかけた。

??? 「ハイ彼女！一緒にお昼どう？」

俺「はい？」

いやナンパかよ…と言う俺の心の声は津軽海峡に投げ捨てておいて、結構可愛い女子生徒が茶色い髪の毛の子に話しかけていた。

よく見たら茶色い髪の毛の子、結構俺のタイプかもしれない…

茶色い髪の毛の子「えっ？（キョロキョロ）…はわあっ！（慌てて後ろを向いて立ち上がった）」

??? 「ほら沙織さん。西住さん驚いていらっしやるじゃないですか」

ナンパ女子「ああ、いきなりごめんね？」

??? 「あのを改めまして、よろしかつたら一緒にお昼どうですか？」

茶色い髪の毛の子「ふええっ?! 私と、ですかっ?!」

2人 「コクッ」

どうやらお昼のお誘いのようだ。どうせこの際だ、俺も便乗して…
茶色い髪の毛の子「じ、じゃあ…あそこに居る男の子も誘っていい？」

…なんだと？向こうから誘ってきた?!これは断る理由がねえぜ!!

??? 「もちろん構いませんよ。ね、沙織さん」

沙織 「もちろん!おい、その君もお昼一緒にどう?」

俺 「俺でいいなら一緒にさせてくれ。」

学食にて…

沙織 「えへ、男の子と女の子2人もナンパしちゃった(^^)」

俺 「ナンパじゃなくて、昼飯の誘いじゃないか?」

沙織 「物は言いようだよ」

??? 「私達、1度西住さんと、もう1人の男子さんとお話してみたかったかったんです」

西住 「えっ?そうなんですか?」

俺 「あ、ワイも?」

??? 「ええ」

沙織 「西住さんはなんかいつもアワアワしてて面白いし、相模くんはあの自己紹介で… (*^艸^) プププ」

俺 「やめてくれ、その話は俺に効く…」

西住 「お、面白い…」

??? 「はい。」

沙織 「あっそうだ。あたしは」

西住 「武部 沙織さん、6月22日生まれ」

武部 「え?」

西住 「五十鈴 華さん。12月16日生まれ」

五十鈴 「はい。」

西住 「相模 大輝君、3月26日生まれ」

俺 「はえ。誕生日まで覚えられてるとはな」

西住 「うん。名簿見て、クラスのみんなど、いつ友達になっても大丈夫なように。」

意外や意外、俺はどうやら西住さんにすでに名前と誕生日を覚えら

れていたらしい。まあクラスに2人しか居ない男子の内の1人だ。覚えられていてもおかしくない。

武部「やっぱ西住さんって面白いよね。あつそうだ、名前で呼んでいい?」

西住「え?」

五十鈴「みほ、って」

西住「…すごい!友達みたい!(≡▽≡)」

武部「大輝君も下の名前で呼んでいい?」

俺「俺?俺は…まあ下の名前で呼んでいいよ。あ、ちなみに俺自体は武部さんのこと、武部って呼ぶけどな」

武部「え、女の子には下の名前で呼ばせておいて、自分だけ相手のこと苗字で呼ぶのズルくない?(?・・―・?)」

俺「ズルくない?って…俺さ、今までだいたい男子からも女子からも苗字呼びされてきたからそっちに慣れてんのよ。それに彼女でもない女の子を名前呼びするのは…ちよいと気が引ける。」

五十鈴「いいじゃないですか。この際ですし女の子を名前呼びする練習と思つて。あ、私のことは華と呼んでください。」

俺「…はあ…分かりましたよ、名前呼びすりゃいいんだろ?…沙織に、華…カアツ…/」

沙織「あつ、照れてる。可愛い(。?。?。?)ニヤニヤ」

私もこうは言ってるけど、ちよつとドキツとしたなく…それに優しいそうだし、もしかして未来の旦那様と出会つちやつた?!(*/ω/*)キヤー!!

俺「うるせえ…ところで、西住さんはどう呼ばれたい?名前」

西住「私は…」

華「大輝さん、私達のこと名前呼びするんですし、みほさんのことも名前呼びして差し上げれば、みほさんも喜ばれると思いますよ?」

実際、私も少し嬉しかったですから。

俺「え、ええ…」

西住「…私も、名前呼びしてくれると…嬉しいな…(???)・―・(???)」

」

俺「ドキッ（・A・／／／）」

やべえ、西住さん可愛ええ！でもこいつら正気か?! 今日初めて会話をした男子にいきなり名前呼びさせるのかよ…

俺「わ、わかった。み、…みほ…／／／」

みほ「…／／／」

すごい…私、お父さん以外の男の人に下の名前で呼ばれたの初めてだけど、結構恥ずかしいんだね…（???・|・???）でも、不思議と嫌な気持ちはしないな…なんでなんだろう…

俺「と、とりあえずさっさと席について飯食っちゃまおうぜ」

みほ「そ、そうだね（◇▽△；；アセアセ）」

それを影で見っていた三笠と真吾は…

真吾「あの野郎…偶然廊下で女子と並んで歩いてるとこを見かけたから後をつけてみれば…リア充爆発しやがれ!!（°。D。?）」

三笠「まあまあ真吾、先輩は後で散々弄り倒せばいいんだから。早く教室戻ろ? フフ、このことをなつみ先生にも密告して、先生含めた僕らで先輩を弄れるネタがまた増えたぞく♪」

真吾「…お前がいちばん悪魔じゃねえか…」

三笠「んく? 真吾も恥ずかしい歴史弄りたいのかなく?」

真吾「なわけ…ってなんでお前が俺の黒歴史知ってんだよ!」

三笠「ふふふつ…（ゲス顔）」

…俺の平穩は早速静かに、だが確実に後輩の手によつて…打ち壊されようとしている…

第7話 相模くん、女子生徒3人とお友達になりました！

みほ「よかつた〜友達が出来て。私、1人で大洗に引っ越してきたから。」

沙織「そつかく。まあ人生色々あるよね。泥沼の三角関係とか、告白される前に振られるとか五股かけられるとか」

みほ「うーん…」

俺「それにそれだと全部恋愛関係が引っ越しの理由じゃねーか。怒られるかもだけどさ、普通振られた位で引っ越しまではしないだろ。」
華「じゃあ、ご家族に不幸が？骨肉の争いですか、遺産相続とか。」
みほ「そういう訳でも…」

俺「お前らもうちよい普通の引っ越し理由思いつかない？特に華は理由が…ね？」

沙織「なんだ、じゃあ親の転勤とか？」

みほ「…」

みほ以外「…」

気まずい…ここはひとつ…

俺「そういえば、俺も一人暮らしなんだわ」

みほ「え？そうなの？」

沙織「初めて聞いたよ〜」

俺「そりゃ今初めて話したからな…(´ーωー、;)」

そう、俺も訳ありで一人暮らしをしているのだ。理由は伏せるが、今現在、アパートに1人である。ちなみに家賃等は、毎月口座に振り込まれてくる。振込人の正体は、俺以外の人間は知らない。

俺「ちなみに一人暮らしの理由は聞かないでくれると助かる。」

沙織「なんで？」

俺「理由がある意味ヤバすぎて人に話せるレベルを超えてるから」
華「なるほど。」

みほ「ちなみに、どこのアパートに一人暮らししてるの？」

俺「俺はららアパート瑞鶴とかいうぶつ飛んだ名前のアパートの201号室。名前の由来は学園艦建造時のモデルになった、空母瑞鶴から貰ったそうなの」

ちなみにうちの学園艦は、大日本帝国海軍第五航空戦隊。通称「五航戦」に所属していた、空母瑞鶴(ずいかく)をそのまま大型化した形状らしい。

某艦隊こ〇くし〇んや某ア〇ール〇ーンなどの艦隊育成ゲームをプレイしている提督、又は指揮官殿の中には、お世話になっている人もいるであろう。艦〇れだと改装したら、姉の翔鶴と一緒に、装甲空母になるから、ありがたいよね!

ズイ (?・☒ω☒) ?ズイズイ (?・☒ω☒) ?ズイ

俺「にしても華さんや…お前食べる量が半端ないな…もやしマシマシラーメン1杯にハンバーグ定食ご飯特盛で…」

華「そうですか?私にとってはこれが普通なのですが…」

俺「胃袋ブラックホールかよ…」

沙織「その摂取した栄養はどこに消えてるのやら…」

その後、教室にて…

沙織「実は2人に相談があつてさあ…」

みほ「え?」

俺「ん?」

沙織「ちよつと悩んで…あたし罪な女でさあ…」

華「またその話ですか?」

またその話?ということは華は何度も聞かされているのであろうか。それに華の言葉のイントネーションから、多分しょーもない話なのだろう。

沙織「近所の人達なんだけどね?毎朝「おはよっ!」とか「今日も

元気だねっ!」って。

俺「それは重罪ですね。判決、死刑」

沙織「判決が重すぎない?! Σ(。ロ。;)」

俺「冗談だよwまあ、でもそれはいい事だと思うよ?そういう事を言われるってことは、少なくともいい印象を持たれているってことだ。誰とでも、異性問わずに仲良くなれるのは素晴らしいことだと俺は思うよ。それはひとえに、沙織のコミュニケーション能力が優れているって証明になるからな」

沙織「そんなに褒められるとなんかはずかしいな(???)・|・???)」

俺「そうか?」

俺は思ったことを述べただけだというのに、なぜ沙織は照れるのか?分からないものである。

みほ「私もすごいと思うよ?どんな人にも好かれるなんて並大抵の事じゃないから、相良くんの言うように、いい事だよ。」

華「みほさんも素晴らしい人ですよ。」

みほ「いや私なんて全然!五十鈴さんが、落ち着いてて芯が強そうで、それに大人っぽくて:すごく羨ましいな!」

華「そんな:いつも堅苦しいってよく言われてしまっ:」

みほ「そう?私なんて前の学校では頼りないっていつも叱られてばかりだったの。どうしたら五十鈴さんみたいになれるのかな:」

華「花道をずっとやっていたから、そのせいかしら?」

みほ「へえーすごおーい!!女らしくて華やかでいいよね」

華「:/:」

沙織「そいえばさ、相良くんのこと全然知らないな。色々教えてよ!というか、その左頬の十字傷どうしたの?」

:ついに来やがったか:俺に関する質問:さて、どう答えるか:

俺「こ、この傷は:ち、小さい時に交通事故に巻き込まれちゃってさ。車にはね飛ばされたんだけど、吹っ飛ばされた時に車の飛んできた破片と、近くに植えられてた木の枝で:その、ザクザクッ!:っつて抉り取られる様に怪我しちゃったんだよ。」

沙織「ほんとに!?痛そく…」

華「事故の時に、脳や内臓にダメージはなかったんですか?」

俺「それだけは不幸中の幸いでさ、脳とか内臓は、当たりどころが良かったのかダメージとかはなかったんだよ。傷と呼べる傷も、この十字傷だけぐらいだし。」

良かった…何とか信じて貰えたっばいな…ほんと、この傷を説明する時は苦勞するよ…何しろ例の事件に関わってた、なんて知られちゃったら、そこから俺に恨みがある人間に情報が伝わって、周りに危害が及ぶ可能性だって…まるでどつかのアニメの厄病神名探偵みただいな…

みほ「相良くんも色々大変だったんだね…」

俺「え?相良くん「も」?」

みほ「あ、いやいや!こつちの話だから、気にしないで! (;)?」

俺「そ、そう?」

ガラララッ!

その時、教室のドアが勢いよく開かれた。

そして、3人の3年生が入ってきた。

あの連中は…

周りの生徒達「生徒会長?」「なんで生徒会が…?」

杏「んく…!やあ、西住ちゃん」

みほ「はっはいつ!?あつ、あの…」

沙織「生徒会長、それに副会長と広報の人。」

桃「話がある。」

みほ「…はい…?」

そしてみほは生徒会3人に教室外に連れ出され…

杏「必修選択科目なんだけどさあ。戦車道取ってね。よろしく。」

みほ「えっ?!あの…この学校には、戦車道の授業はないはずじゃ…」

桃「今年から復活することになった」

…あの会長、みほにまで戦車道やらせようってのか?あれ?なんかおかしいな…なんでわざわざ一般生徒に必修選択科目を戦車道と選

ぶように生徒会から圧力を掛けるんだ？普通ありえないだろ……

：だが、俺にも脅しをかけてくる連中だ。なんか狙いがあるともて間違いないだろう……

みほ「私、この学校は戦車道がないと思って、わざわざ転校してきたんですけど……」

杏「いやぁー運命だねえ」

みほ「必修選択科目って自由に選べるんじゃないかとにかくよろしくー」
バシッ！

そして、みほは死んだ魚のような目をしたまま棒立ちしていて……

みほ「……(□)？」

授業中も……

なつみ先生「では次の問題を……みほさん！」

みほ「……あつ、はい……(□)？」

なつみ先生「？？どうしたのです？気分が優れないですか？……だったら保健室に行くのです。」

みほ「はい……フラフラ……」

みほ、だいぶふらついた歩きしてるな……あれは不安だ、誰か一緒に行ってくれたらいいんだが、そんな奴がいるわけ……

沙織「……先生！私もちよっとお腹が……」

華「私も持病の癩が……」

： 居 た よ ……さて、俺はこれで安心して昼寝が「相良くん」、昼寝する程余裕があるなら、みほさんの代わりに問題を答えてもらおうのです（ニッコリ）」

俺「まじっすか……」

一方保健室では……

刈谷「ああああああああ……きついよ……ん？誰か来た……」

みほ達3人組「「うくん……」」

確かあの3人の女の子達、相良くんの友達の……どうしたのかな……気になるな……悪いけど、少し聞かせてもらおうよ……

沙織「……みほ。」

みほ 「…ゴソツ」

沙織 「ああ、良いよ動かなくても。」

華 「早退されるのでしたら、カバン、持ってまいります。」

みほ 「ありがとうございます。」

…西住さん、何かあったのかな…武部さんと五十鈴さんは、西住さんの事が心配して着いてきた感じかな…

「沙織 「いったい生徒会長に何言われたの？」

華 「良かったら話してください」

みほ 「…今年度から、戦車道が復活するって…」

華 「戦車道とは、乙女がたしなむ伝統的な武芸の？」

沙織 「それとみほになんの関係があるの？」

…やっぱ相良くんが言ってた様に、戦車道が復活するっていうのは事実みたいだね……ん？そういえば、確か戦車道の中の派閥というか…流派って言えばいいのかな？まあいいや。それで確か…戦車道流派の中に西住流とかいう、流派があったような気が…

みほ 「…」

どうしよう…武部さんや五十鈴さんに話しても…いいのかな…でも、これは私一人の問題だし…でも…

??? 「一人で考えても答えが出ないなら、他人に話すのも一つの手段よ？」

みほ 「えっ!？」

沙織 「みほ？」

華 「どうかなさいました？」

みほ 「あついやその…今、誰かにずっと前に言われた言葉がなんでか聞こえて…でも、最近どこかで聞いたような…誰だろう…」

刈谷 「…」

おいおい……どしたの西住さん…いきなり幻聴聞こえてるの…?何が聞こえたのか知らないけど…

みほ 「まあいいや…正直に言う…私の家は…代々、戦車乗りの家系で…」

華 「まあ。」

沙織「へえ〜。」

なるほど、これは意外だ…

みほ「でも、あまり良い思い出がなくて…私、戦車を避けて、この学校に来たわけで…」

…！そうか。西住さんってどこかで聞いたような名前だと思ってたら、戦車道の有名な流派、西住流のことか！家が代々戦車乗りの家で、西住と名がつく流派は西住流以外にないしな。でも、西住流の家に産まれたのなら、戦車道の英才教育を受けて育つはずだよな。なのになんで、戦車を避けてこの学校に来たのかな…

沙織「そつかく…じゃあ無理にやらなくていいじゃん！」

みほ「えっ？」

沙織「第一、今どき戦車道なんてさ〜、女子高生がやるものじゃないよ〜」

華「生徒会にお断りになるなら、私達も同行します。なんなら、相良くんにも来ていただけるかもしれませんね。」

みほ「2人とも…ありがとう／＼／＼」

キーンコーンカーンコーン〜

キーンコーンカーンコーン〜

華「授業終わってしまいました…せつかくくつろいでいましたのに…」

沙織「後はホームルームだけだね」

ウィーンウィーンウィーン…（校内放送）

刈谷含めた4人組「「ん？」「ん？」」

放送「全校生徒に告げる。体育館に集合せよ、体育館に集合せよ。」

刈谷「ノソツ…行かなきゃ…」

沙織「あれ？刈谷くん居たの？」

刈谷「あ、ああ。ちよつとお腹痛くてね…4時間目から寝てたんだよ。」

華「そうだったんですか。ということはおもしかして、先程までの私たちのお話も…」

刈谷「えつと…その…ごめんね、盗み聞きして…悪いことしちゃっ

たのは分かってるんだけど…聞こえちゃってたね…」

沙織「居るならいるって言ってくれたら良かったのにく。乙女の会話を盗み聞きするのは良くないよ！」

刈谷「ご、ごめんね…それよりさ、僕これから相良と一緒に行くんだけど、その時に相良に話、通しておこうか？何やら相良に協力要請しようとしてたみたいだし」

華「じゃあ、お願いしても宜しいですか？おふたりとも、構いませんよね？」

沙織「私はいいけど…みほは？」

みほ「私も…相良くんや刈谷くんなら信用できるし、いいかな」

刈谷「了解。じゃあこのことは俺の口から相良に話しておくけど、念の為に、西住さん達からも話しておいた方がいいよ。」

その後、体育館に行く途中の廊下で…

俺「へえ〜！なるほどなるほど…こいつあ有力な情報ありがとな。」

刈谷「女子の会話盗み聞きした内容を報告してるだけだから、褒められたものじゃないけどね…」

俺「いや、おかげで気になってたことが解決したし、気にすんな。」

そして、体育館にて、我が校に戦車道が復活するという事が全校生徒に通達された。途中、PVを見せられたのだが、そのPVの中でII号戦車が大量にでてきた時は、ミリヲタである俺からすると、さすがに興奮が隠せなかった。ただ、生徒会の解説の中にあつた、「無限軌道のように、カタカタと愛らしい以下略」という部分にはツツコミを入れたくなってしまう俺は異常なのだろうか…

第8話 相模君、悪夢の再来です…

体育館での戦車道復活の通達が終了し、俺たちは教室に戻りながら話をしていた。

沙織「私、やる!」

俺「え?何を?」

沙織「戦車道ってさ、今すぐく人気なんですよ?人気ってことは、男の人にも見てもらえるじゃん?だからやる!」

「どうやら沙織はモテたいから戦車道をやるらしい。そんな理由でやってもいいのか?…」

沙織「みほも一緒にやろうよ!!家元でしょ?」

みほ「え?...えつと...その...」

華「そうですね。私、みほさんの気持ち、よく分かります。」

俺「そっか、華は華道の家がお家なんだっけか」

華「ええ...でも私、昔からずっと、華道よりアクティブなことがやってみたかったんです。」

みほ「え?」

華「(立ち止まって...) 私も戦車道、やります!」

まさかの華まで戦車道を履修するようだ...まあそれはいいんだが...こいつらまさか...

華「西住さんもやりましょうよ!色々とご指導ください。」

みほ「ええつと...」

沙織「ガシツ!みほがやれば、ぶつちぎりでトップの成績取れるよ!!」

その後、みほは帰るまでずっと迷ったというか、困ったような顔を見ながらも帰っていった。俺は、午後6時30分に生徒会室に呼ばれていたので、訳を話してみほ達には先に帰ってもらったのだ。そして、俺が生徒会室に呼ばれた理由とは...

俺「...俺を呼んだってこたア、返してくれるんですよ。...「アレ」を」

杏「ごめんねく返すのが遅くなっちゃって。まあさすがにいつまで

もあんなもん持つとくのもあれだし…副会長」

柚子「はい、相模君。君の刀…返すね。」

そう。刀の受け取りである。実は今日まで、何故か生徒会が俺の刀を持っていたのだ。俺は直ぐに返すよう要求したのだが、どうやら俺が刀を持つことを認められているのか確認するのに、少々手間取っていたらしい。

俺「ありがとうございます、副会長。俺の刀、確かに返却していただきました。」

杏「でもさあ、そんな物騒なものどうやって持ち帰るの？いくら日が沈みかけてて暗いとはいえ、刀なんて持ち歩いてたら警察呼ばれるよ?」

俺「その点は心配なく。竹刀用のちよつと大きい竹刀入れを持ってきたので、これに入れて…ゴソゴソ…つと…それじゃ、失礼します。」

そして、帰宅途中…

俺「…」

…誰かにつけられている?みほ達は既に帰ってるだろうし、三笠達とも思えない…一体誰だ…?…まあ気の所為かもしれんし、さつさと振り切つて帰るか…

俺「タツタツタツタツ…(歩く速度をあげた)」

…やっぱりついてくるか…仕方ねえ、少し遠回りになるが、裏道に入つて…

???「ケケケツ…やつと見つけたぜ…久しぶりだよ、なあ?」第二の緋村剣心「さんよオ?」

俺「!?(後ろを振り向いた)」

そこには、10代から20代ぐらいの髪の毛ボサボサの男が、仁王立ちしていた。

俺「…?人違いじゃあないですか?それに誰です?第二の緋村剣心つて…知らないの?これで失礼します。」

???「あれれえ?まさか君、自分の事忘れた訳じゃあないよねえ?その左頬の十字傷…そしてその日本刀…ああそうか、こういえばわかつてもらえるかな?…」

ねえ、「篠原くん」？」

俺「!!」

俺「…てめえ、何故俺の事を知っている？それにさっきの口ぶり…
まるで以前、俺とあったことがあるような言い方じゃねえか。」

???「あら？忘れられてたかく。悲しいなあ、あれだけ戦ったのに。
敵として…」

俺「ああ？俺とあんたが戦っただア？いつだよ。全く記憶にねえ
ぜ。」

???「そうかあ…じゃあ…こうしたら思い出すかな？シイヤアアア
ン…（背中に隠していた仕込み刀を抜いた）」

俺「そんなもん持ち歩くとは…お前最初からドンパチやる気できや
がったな？しかも例の事件のことも知ってんだろう？」

こいつの狙いは、はじめから俺だったわけか。だが、この男…一体
何者だ？

俺「…いいだろうよ。受けてたつぜ…ただし後悔すんなよ。俺に喧
嘩ふっかけた事…ゴソゴソ…カチャツ…（竹刀入れから刀を取り出し
た）」

でもこいつ、見たところ殺し屋とかプロじゃなさそうだな…わざわ
ざ抜刀するまでもない…拳でケリつけるか…刀出した意味なかった
かな…

???「君こそ、俺に「また」見つけたことを悔やむといいさ…理由
は、すぐに分かるよつザツ!!（刀を突き出して恐ろしい速さで突っ込
んできた）」

俺「なっ…!?バツ!!（飛び上がって避けた）」

ドガアアアアン!!シユウウウウ…パラパラツ…

Σ＼(。D。;) おいおいおいwwwwなんつう奴だよ?!?!? 奴が突撃した鉄筋コンクリート造りのブロック塀がへこみやがった!! なんつー威力だよ!! こんな事できる奴がプロじゃないわけない!! バリバリに人を殺し慣れてる奴じゃねえか!! こんな奴に拳で対抗するなんざ自殺行為すぎる!! 仕方ねえ、ここは…

俺「：抜刀するしか：ねえかつ：!! シャキィン! (竹刀入れから出していた刀を抜刀した音)」

??? 「フフ：フフフフ：フフフフフツ…：アツハハハハ!! やつぱ君は凄いいねえ! 俺が今の攻撃を敵に避けられたことなんてほとんど無いのに、まさか躲すとはねえ…：いいねえいいねえ!! 興奮させてくれるねえ!! やつぱり戦いはこうでなくちやア、いけないねえ!!」

俺「ガバツヒユツ! シュタツ：(着地音)：てめえ、一体何者だ? 壁がへこむほどの技の威力と、それを生み出す驚異的な脚力：ぜつてえまともなやつじゃねえな? チャキツ (刀を構えた)」

??? 「そんなことを言うなら君だつてまともな人間じゃないだろ? 僕の今の攻撃、普通の人間なら避ける間もなく串刺しになるところだよ?」

俺「俺は職業柄、見た目はこんだが身体能力は普通の人間より高いんだよ：貴様も知ってるだろうが、俺が居た界限ではこんくらいの身体能力がなきや命がいくつあつても足りないんだよ…」

こいつの動きや話し方からみて、こいつ多分2015年事件に関わってるな? 今のこの時代、これほどの剣さばきと明らかに経験豊富な輩と言えば間違いなく2015年事件関係者と言つていい。しかも俺と同じように、最前線で戦い抜いてきた奴か：こりや面倒臭いな…

??? 「おい貴様ら。そんな所で何をしている。」

俺「ん?」

??? 「(。D。) チツ：邪魔が入ったか…：ここは一時引くか…：まあいい。また会おうじゃないか相模君。君を殺すのはしばらくお預けだ…：スウツ…」

俺「あつ!! おいてめえ!! 待ちやがれつ…：つて、消えちまった…」

あいつ…一体何者なんだ?…いきなり現れて、消えやがった…ほん
とに、一体…

???「まったく…こんな街中でドンパチするとは、一体何を考えてん
だ、このバカが。(バカを見る目)」

俺「ああ!?バカとはなんだバカとは!!お前初対面の人に対する礼
儀ってやつを知らねえのか!」

???「そうやって直ぐに激昂するところがバカだつて言ってるんだよ。
それに俺の顔をよく見やがれ、バカ丸出し野郎が。」

こいつ…人のことバカバカ言いやがって…(☒言☒?)
……ん?にしてもこいつの顔どつかで…

俺「…つて!!お前齋藤 一(さいとうはじめ)か!」

齋藤「今更気づくとはな。ここが戦場だったらお前は死んでるぞ。
相変わらず変わらんア、このアホが。」

俺「なるほどね…通りで齋藤つて名前に聞き覚えがあるわけだ…久
しぶりじゃねえか、齋藤。」

こいつは齋藤一。5年前、俺と同じように2015年事件を戦い抜
いてきた、プロの剣術屋。得意技は、明治維新時に新撰組副長である
土方歳三が生み出した平突きを発展させた牙突…に更に改良を加え
た牙突改を使う。しかもイケメンで身長が187cmもある。羨ま
しいぜ…

齋藤「にしてもあの男…お前のことを知っているようだったが、お
前は知っているのか?」

俺「俺が知るわけねえじゃん…チャキン…(刀を収めた)」

それにいちいち戦った相手を覚えられる程、記憶力ねえよ…」

齋藤「まあお前の頭ならそうだろうな」

俺「ピキッ(°?)」

コノヤロウ…

齋藤「それより早く帰った方がいいぞ。あれだけ大きなことしたん
だ、警察がもうじき来る。」

俺「そうだな…それじゃ、先に帰るぜ…」

…にしても…ほんとにあの謎の男…一体何者なんだ?

第9話 戦車、探して乗ります!!前編

襲撃を受けたあと、公園のベンチにて…

齋藤 「お前、さつき襲撃してきたやつに思い当たる節は？」

俺 「さつぱりさ…ただ…あの動き…技の威力…手練であることは間違いないんだが…一体誰だかは…そういうお前は？」

齋藤 「悪いが、俺もさつぱりなんだよ…」

俺と齋藤は、近くの公園のベンチにて、会議というか、話していた。内容は勿論、先程俺を襲撃してきた謎の男に関する事だ…

俺 「…ハア…仕方ねえ、「カラ屋」に依頼すつか…」

齋藤 「まあ、それが妥当だろうな。俺も調べておくが、お前も自分の足で調べておけよ。」

俺的には、あんまりカラ屋に頼ることはしたくないんよなあ…

あいつら情報捜査管理に関しちや、もはや変態レベルの技術持つてるからむしろ怖いんだよな…

俺 「とりあえず、今日はこの辺で解散しようや。明明後日はいよいよ戦車道の授業が始まるらしいし。関係無いけど早く寝たい…」

ここで、さつき俺が喋った「カラ屋」とはなんなのかを解説しよう。

カラ屋とは、日本政府…というよりは、内閣総理大臣直轄の、情報搜索管理機関、「鴉天狗（からすてんぐ）」の略称である。現在の内閣総理大臣は、伊藤貴洋（いとうたかひろ）なので、伊藤貴洋の下にある組織という事になる。

鴉天狗の基本的な仕事は、災害時の情報収集、防衛省との共同での軍事機密管理、国の財務情報の管理などの、国家の運営に欠かせない、重要な情報を管理、保全することである。

…しかしこれは表向きの仕事。裏の顔は、各国へ送り込んだスパイからの情報を管理したり、外国からの機密情報の告発の受付、国内か

らの内部告発の受付、政府がヤバいと判断した人間、あるいは組織を調べたり、時には調査員を潜り込ませたりする、結構危ない仕事を本業とする、かなりヤベえ組織。本来は憲法や法律に違反している非法組織なのだが…

そこは国家の運営に欠かせない組織であるのと、情報操作と印象操作で国民を誤魔化している。え？情報操作してる時点で民主主義が破綻してるだろって？

：政府やメディアが発することをよく調べもせずに、勝手に鵜呑みにして信じ込む国民も悪いんだよなあ…

翌日：

俺「やべえやべえやべえ!!昨日寝るのが遅かったせいで遅刻しそうだよクソが!!バアン！（ドアを閉めた音）」

まさかの遅刻しそうなのである…原因は昨晚、カラ屋へ捜査依頼をしていたのと、帰ってきてから久々に3DSをやりこんでいたため…という、なんとも無様な理由である…そしてこのままでは完全に遅刻するので…

俺「こうなったら…バアツ!!（飛び上がった）」

俺「最強時短ルート!!屋根上走り!!」

俺「おらアアア!ガチャアツ！（着地音）」

…まさかの屋根上を走るのである…

俺「ホントはめちやくちや怒られるけど遅刻することには変えられない!!タツタツタツタツ…」

そして、しばらく屋根上を走りながら登校していると…

俺「ん？あれは…（止まった）…みほと…なんだあの眠たそーに歩いてるやつは…」

その視線の先には、みほと非常にフラフラとした歩きをする1人の大洗女子学園の生徒が居た…

みほ「あつあの…しっかりしてください（…ω…）」

???「眠い…朝はなぜ来るのだろう…（…ω…）。○○アワアワ」

みほ「とにかく行きましよう…(A ; ; . ω .) アセアセ」
あのままじゃあ間に合わんな…しゃーない…

俺「援護してやりますか…よつと…(電柱に飛び移った)ホイホイ
ホイ…よつと!(地面に降りた)」

みほ「?!大輝くん?!何してるの?!」

俺「え?遅刻しそうだったから屋根上走ってたからお前ら見かけたか
ら…」

大輝くん何してるの…人の家の屋根の上を走ってきたってことで
しょ?…でも彼にこの人を学校に連れていくのを貰えたら…

みほ「あ、あの…この人を学校に連れていくの、手伝って貰えない
?」

俺「元々その気で来たからな、ラジャ!(?—?)」

??? 「ん…?お前誰だ…」

俺「あれ?制服からみてわかんない?大洗の生徒だが…」

??? 「そのくらいわかる…だがうちは女子校…って…何してる?!?!」

この謎の少女が驚くのも無理はない。なぜなら彼女は今…

俺にお姫様抱っこされているのだから…

俺「こうなったらお前を抱えて学校まで走る!!みほ!着いてこいよ
!!」

みほ「あつ、はい!」

??? 「ち、ちよつと待て!!(顔真っ赤)」

俺「聞く耳持たぬう!!」

そして学校には…

風紀委員「冷泉さん?これで連続245日の遅刻よ?」

俺「245日?!」

冷泉「あつ…あつ…(顔真っ赤)」

…結局間に合わなかったのだ…しかも何故か冷泉というこの女の
子は顔真っ赤だし…

俺「あの…風紀委員さん?入ってもいいですかね…」

風紀委員「…?!あつ…そ、そうか、貴方が噂の共学化テスト生ね?」

俺「噂の？」

風紀委員「朝のホームルームで…「言わないで…」

冷泉「く!!!! (顔真っ赤)」

俺「あの…ご、ごめんなさい… (…?) …;) お願いだから警察だけは…」

冷泉「…借りは返す…いつか必ず… (顔真っ赤)」

こいつ…いきなり現れたと思ったら私をお姫様抱っこして全力疾走するとは…おかげで眠気は吹き飛んだが…恥ずかしかった…

俺「じ、じゃあ俺先に行くから…」

何とか警察沙汰だけは回避出来た…なに綱渡りみたいなことしてんだか…

そして、ついに初めての戦車道の授業が始まろうとしていた…